



自然保護全国集会を終えて

自然保護担当理事

谷内 剛

今年の自然保護全国集会は「どうする！山の野生生物との関わり」をメインテーマに7月16・17日の2日間、高知市で開催した。1日目は高知県立牧野植物園を会場として各支部の活動報告と基調講演、4つの分科会を行い、2日目は牧野植物園の観察会や高知市郊外の工石山（くいしやま）を中心としたフィールドワークを行った。

基調講演は高知大学教授であり四国支部員でもある、石川慎吾会員による「SOS三嶺の自然」。これは剣山系三嶺山域でのシカの食害の調査からその対策まで一連の研究

究事業についての話を聞ける貴重な講演であった。また、同様の問題を抱える地域の参加者にとっても参考になったのではないだろうか。その後の4グループに分かれた分科会もそれぞれが「山の野生生物」との関係性を軸に展開され、集会全体の構成として統一感がとれたものになったと思う。

その一方で、反省すべきこともある。それは活動報告の時間が不足してしまったことである。自然保護委員が一堂に会する貴重な機会でありながら、この日のために準備をしていた発表者の方々に対し非常に申し訳ない結果となってしまった。開催地や日程の制約など難しい問題はあるが、今後できるだけバランスのとれた集会となるようにしていきたいと思った。

木の目草の芽

2016年8月24日
公益社団法人
日本山岳会
自然保護委員会
TEL: 03-3261-443

年間購読料 1,000 円
申込 : 047-463-8721
syuaki@pony.ocn.ne.jp
郵便番号 00180-4-710688
加入者名 : 川口章子

第123号

全国集会報告号①

〈目次〉

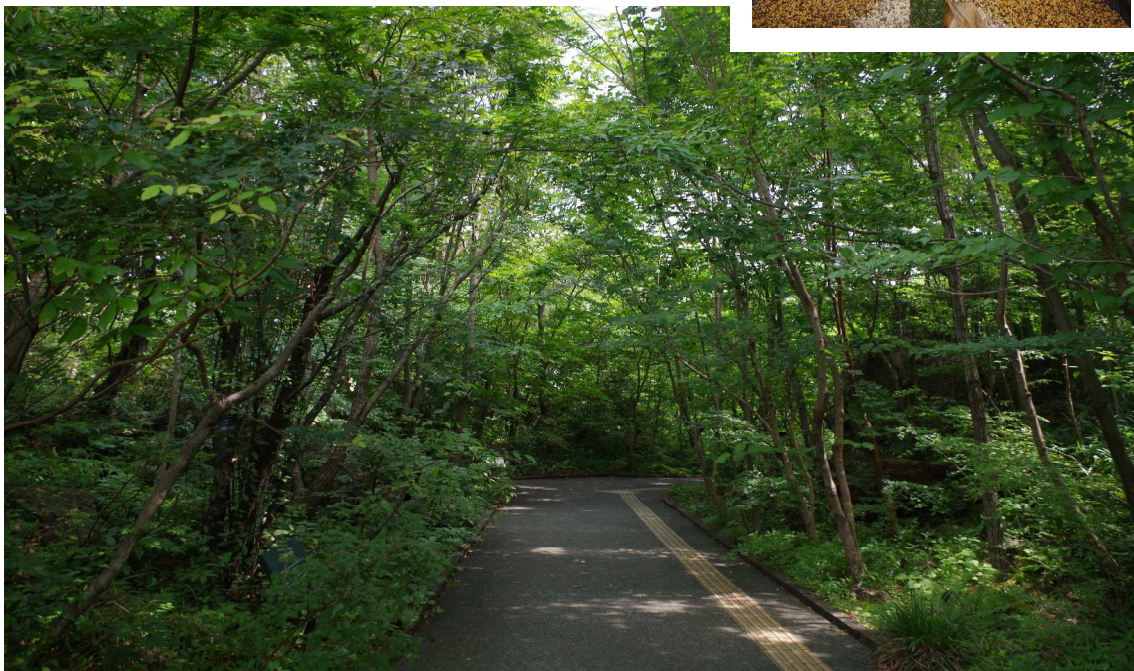
- P.1 全国集会を終えて 谷内 剛
- P.3 副会長挨拶 山田 和人
- P.4 来賓挨拶
高知県知事挨拶（代読）
高知市長挨拶（代読）
- P.7 共催者挨拶
牧野植物園園長 水上 元
- P.8 グループ
ディスカッション
- P.15 全国集会に参加して 山川 陽一

自然保護の分野の講演会はその地域性や特殊性であったり、旬の話題性があるものなど、取り上げられるテーマはどれも興味深く面白い。しかし、専門家ではない我々がそのまま実践するには困難なものも多い。それでも「いま我々にできることは何か」といった自問自答の作業を続けることの必要性を強く感じている。シカの食害問題は急速に拡大している喫緊の問題である。今後とも継続して全国にネットワークをもつ自然保護委員会の強みを生かした活動ができればと思った。

最後に四国支部やNPO法人剣山クラブの方々には事前準備や資料作成、鹿を中心としたジビエの用意や懇親会など数々のご配慮に改めて感謝を申し上げたい。

■牧野植物園について

牧野富太郎博士の業績を顕彰するため、博士逝去の翌年、1958（昭和33）年4月に高知市の五台山に開園。起伏を活かした約6haの園地には、博士ゆかりの野生植物など約3000種類が展示されている。集会直前の7月12日には「ショクダイオオコンニャク」の開花で話題となった。



〈副会長挨拶〉

日本山岳会副会長 山田和人

日本山岳会副会長をつとめております山田でございます。本日はこのようにみなさま遠くからお集まりいただきまして、ありがとうございます。今回の開催にしましては、四国支部のみなさまのご尽力、それから県立牧野植物園の絶大なるご協力によって実現しております。まことにありがとうございます。またご来賓として高知県、高知市、それから林野庁、環境省からもお越しいただきまして、まことにありがとうございます。

今年はみなさまご存知の通り、8月11日の「山の日」が制定されて、第1回目の祝日となります。

この祝日は「山の恵みに感謝する日」と銘打ってスタートいたしますが、山の恵みに感謝することと、自然の保護、保全ということはほとんど同義語ではないかと思っております。恵みに感謝することができることは、我々の美しい国土の自然が守られ存続してゆくということだと思いますので、今年は特にその意味をか

みしめていきたいというふうに考えています。

自然保護活動については、午前中に各支部の報告がありました。その中で、色々な活動をしているということですが、やはり原点は自然観察であると私は思っております。山に登って自然をよく見る、それから

それから、起きてしまったことに対しての我々の振り返り、あるいは今どうなっているのかをしっかりとらえるという意味では地道に長年続けてこられた宮城支部の報告も印象に残りました。できるだけ自然を生かした形で環境への負荷を小さくするという意味で多摩支部の石を使って登山道を示

しているという報告もありました。私は千葉に住んでいまして、今年初めて雲取山に行ったのですが、あれだったのか、ということをご報告を聞きながら思いました。



今日は「山の野生動物との関わり」ということで、特にシカの食害というのがテーマになっております。人間とシカがどのようなにかかわり、どこに折り合い点をもってくるのかということについての象徴的な問題であると思えますし、非常に難しい、これまでになかったような問題だと思いますのでぜひ、良いディスプレイができればというふうに考えております。

山だけでなく川や私たちの生活を支えている自然というものをよく観察してよく知る、そのことが大事ではないかと。静岡支部のリニア問題の報告にもありました。今、現状どうなっているかということを知ることだろうということが心に残りました。

〈共催者挨拶〉

牧野植物園園長

水上 元

みなさんこんにちは、高知県立牧野植物園の園長、水上でございます。本日は日本山岳会の自然保護集会、非常に重要な集会を、この牧野植物園でご開催いただき、また当園を共催者として加えていただきましたこと、まことにありがとうございます。また全国各地から、この四国の植物園にお集まりいただきましたことにつきましても厚くお礼申し上げます。

さて、この牧野植物園でございますが、下野実行委員長のお話でも少しご紹介いただいておりますが、今から58年前に高知が生んだ日本の植物分類学の父である牧野富太郎博士を顕彰するということで設置をされております。当時は南門の方のごく一部、数ヘクタールの小さな植物園でございましたが、2000年、今から16年前にここをリニューアルするということで園地面積を18ヘクタールに拡張いたしました、この本館ですとか、階段シアターを含む北園などを設置してお

ります。同時に研究型植物園でいこうという方針を掲げまして、前田綾子研究員もそうでございますが、研究を職務とする職員、研究員からなる研究科と研究室を設置して、事業を始めております。ですから牧野植物園の最も主要な部分は研究でございますが、その研究のテーマの最も重要なものは、植



物の多様性の解析と、その解析結果を基礎にした、絶滅危惧種をはじめとする、希少種の生育と内外での保全ということでございます。そして、そういう点では、この日本山岳会の自然保護活動とも情報や活動を共有できる部分があるのではないかと、期待をいたしております。また一方では、

牧野博士というのは、全国の植物愛好家を育てたという教育者でもあったわけでもあります。その活動を引き継ぐということで、植物の知識、植物と人間とのかかわりに関する様々な知識を教育・普及するということも積極的にやっております。今日はちょうど、昆虫植物展ということで、昆虫と植物とのかかわりを、フェアブルと牧野をナビゲーターとして見せていくという企画展示も始めております。みなさん今日はあまり周りを見られる時間がないのですが、明日、またこちらに戻っていただけたらどうかっております。ぜひ、広い植物園でございますが、迷うことなくしっかり見ていただきたいと思っております。

それでは、今日明日と開かれます自然保護全国集会が成功いたしますことを、共催者の一員として、祈念させていただきます。ありがとうございます。

(記録：元川里美)

＜グループディスカッション報告＞

①「高知県の野生植物の現状」

担当講師：前田綾子（牧野植物園研究員）

報告：山田和人

②「四国のツキノワグマは警告する」

担当講師：山田孝樹（NPO 法人四国自然史科学研究センター研究員）

報告：宮本良之

③「山岳植物園 情熱の45年ーオアシスの可能性」

担当講師：山田勲（日本山岳会四国支部会員 岳人の森主人）

報告：大船武彦

④「人間とシカの自然界」

担当講師：平井滋（NPO 法人剣山クラブ会員）

報告：近藤雅幸

グループ①

「高知県の野生植物の現状」

～鹿食害について～

最初に前田綾子研究員（牧野植物園）から高知県内の植生変化について写真によるプレゼンテーションがあった。

・右鎚山系では鹿による食害は小さいが、県東部の山々では深刻な植生変化が起きている

・石立山、西又山では、林床植物がスズタケだった所は林床は何もない状態に

・捨身ヶ岳では笹がなくなり、稜線の崩壊が起こっている

・森林環境税により防鹿柵設置等の対策をおこなっている

石川愼吾教授（高知大）と前田研究員から、鹿食害への対応の現状について紹介があった。

・33か所で調査をおこない、12箇所には防鹿柵を設置し。柵に囲まれた場所では既存植生が細々と守られている

・鹿の個体数が減った時にはここで守られた種が核になって植生が回復することを期待している

・銃、罠などによる捕獲で昨年は約21000頭を駆除（目標は30000頭）
・この内、食肉の流通に乗るのは5～6%に過ぎない

ここまで鹿が爆発的に増えた原因及び食肉利用についてディスカッションがあった。
・昭和30年代の拡大造林により奥山に鹿





が進出し始めた

- ・ 鹿については害獣でなく、保護政策が続いていた(現在は捕獲頭数制限はなくなっている)

- ・ 林道開通により鹿の移動が容易になっており、食べ尽くしたら別の場所に集団で移動

- ・ メスは2歳から10歳まで毎年1頭ずつ出産するので、笹、草本などの食料が確保されれば容易に頭数は増加する

- ・ 狩猟圧の減少により頭数が増えていたが、爆発的に増加するまで行政も気付かなかった

- ・ 食肉の処理場は県内17箇所あるが、その施設まで運ぶことは困難な場合が多い。

- ・ 山中で解体したものは、流通できない。

- 対策についてのディスカッション

- ・ 根本的な対策は、頭数コントロールしかない

- ・ 県単位でなく、全国的な問題として捕獲を進めることが必要

- ・ 銃による捕獲以外にも罠やくくり罠等の方法を組み合わせることが重要

- ・ 食肉以外にも鹿皮の利用等を進めることを考えてはどうか(山梨県の例)

(報告: 山田和人)

グループ②

「四国のツキノワグマは警告する」

最初にNPO法人四国自然科学史研究センター研究員の山田孝樹さんから四国のツ



キノワグマ(以下熊と記す)の現状について講話を戴いた。

西日本では熊の生息地が分断され絶滅のおそれがある環境省の地域個体群に4カ所が指定されている。既に九州では絶滅したとしてリストから外された。四国の熊は生息数が少なく、十数頭まで減少している。

70年前には四万十川の上流や剣山山系、愛

媛県の一部でも確認されていたが1980年頃にはほとんど姿を見かけることが出来なくなった。その理由は、1. 拡大造林で生息環境が減少した事。四国の森林率は74%と全国平均の67%より高いが人工林比率が61%と全国平均の41%よりかなり高く、熊の餌を供給する広葉落葉樹の自然林が少ない。2. 杉やヒノキの針葉樹の皮を食べる害獣として駆除された。昭和初期から1980年代まで補助金を出して駆除をしていた。植林地での皮剥ぎが問題として1970年代では1頭40万円の補助金が出て四国内で60頭が捕獲された。保護の取り組みに向かう転機は姿を見せなくなった熊が1986年に捕獲され生存が確認された事で、1986年に高知県、1987年に徳島県そして1994年に四国全域が捕獲禁止となった。2012年には環境省、徳島県、高知県が2014年に愛媛県がレッドリストに指定した。環境省は国定公園剣山山系の一部を鳥獣保護区とし、林野庁は四国山地緑の回廊を設定して保護地域となった。生息地の消失は止まっているが人工林はそのまま広葉樹林が拡大している。訳ではなく個体数の回復傾向は見られない。

2012年から2014年にかけて捕獲した3頭の雌の熊にGPSを取り付け熊の位置情報を取得してデータを解析した。その結果、行動範囲は植林地への選択性は低く、針葉樹林、落葉広葉樹林の選択性が高かった。標高が900mから1500mの標高帯で活動を選択していた。道路近くでは活動の選択性は低く道路から1km離れた場所を選択していた。生息適地は高知県、徳島県の剣山山系であった。今後も科学的な根拠に基づいて具体的な提言をしていかなければならないが、熊の生息環境の質の向上、生息地の保全、生息域内の資源量の少ない箇所では生息環境の拡大と緑の回廊の連絡による分断の最小化や人工林を広葉樹林に変える事が必要と考える。そして関係機関と連携・協働してクマの保存協議会の立ち上げや熊の保全方針の策定が急務である。ニホンジカによって下層植生の衰退が進んでいる事もあり四国の熊が絶滅の危機にある厳しい現状が知られていない。そして絶滅の社会的な関心が低い事を広く県民に知らしめる事が大切である。熊を保護しなければならぬと言う県民のニーズが無い中で強く保全の意義を訴えていく。



この講話を受けてグループのメンバーが自己紹介とツキノワグマを選んだ理由について説明した後討議に入った。実際に日常生活の中で熊と遭遇する可能性がある石川支部から、学童が熊とニアミス、能登島の先端の牧草地に出没している。標高が200〜300mで10〜20kmの範囲で移動していると現状報告があった。京都・滋賀

支部からは湖北、比良で南北22kmの範囲で目撃されている事、ミツバチの巣の被害が鈴鹿に集中しているとの報告があった。広島支部から西中国山地では孤立して300〜500頭が生息しており、野生の頂点としての存在で怖いけど愛着がある。島根県

との県境では昔から生息しており、子供の頃から熊は車中から見慣れているもので接し方は身に付けている。地元の湿地帯では5月になると毎日目撃情報があるが事故は発生していないと報告があった。多摩支部から熊は一緒に遊んだり癒しになる対象ではないが、人間と共生するには哲学的な背景を練り上げておく必要があると思

った。東海支部から四国に熊が居ないと思っていたが間違いであった。本州では人と事件を起こしているが、これから四国で熊と人がどのような良い関係を作っていくのか質問が出た。

熊と接する機会が現在ではほとんど無かった四国支部からは熊の行動に関して夜行性か、冬眠の穴は自分が掘るのか質問が出た。またNPO法人剣山クラブの会員から今年に入って2件の目撃情報があった事が報告された。自然の多様性が大切だから頭

数を増やすべきだ、本州の他県から熊を四国に連れて来ることは出来ないのか、十数頭しかいないとすれば血が濃くなることにより生殖にリスクは伴わないのかと質問が出た。

自然保護委員会本部及び司会者からは奥多摩で登山家の山野井氏が熊と格闘した事で有名だが適度な頭数が生息している。四国の熊はどうすれば増やすことが出来るか、熊の生息状況はどのようにして調査するか、熊のマニユアルが必要か、山岳会としてこれから何が出来るかと問題提起があった。

これらの質問や意見に対し山田講師から以下のような発言があった。昔から熊が生まれ生息する環境は豊かな森であった。山の一部の存在として恐れ敬まわれていた。ミヤマサクラは実を食べた熊によって種を遠くまで運んでもらっていた。温暖化で上に移動したが生態系の一部を担っている。熊とはどういう動物か広島の熊研究者の話だが、熊は向こうからむやみに襲っては来ない。1000回遭遇して3回だけ向かってきた。それは冬眠中の穴に棒を突っ込んだ時だった。熊は30〜70万年前に日本に

来て3つのグループに分かれた。四国に本州から持ってきた場合、人身被害を起こす熊の責任は誰が負うのか、遺伝子の違う個体が交配するのは問題がある。四国でまだ出来る事が他にある。絶滅したら他から持ってくるのも一つの選択肢である。熊の生息

状況の調査は爪痕や熊剥ぎを調べるのが長期に残るのでこれらを一つ一つ積み上げていく。全国で決まったルールによる聞き取り調査を行ない塗り潰していく。雄雌の行動は多少違い、雄は移動範囲を動くが雌は餌場が分かっている所において土着傾向が強い。熊が冬眠する場合自分では穴を掘る事はない。熊は100%冬眠して体温が下がるが、いつでも起き上がれる状態にいる。熊は朝夕に出て夜は寝ているが、人里には夜に出没して柿やクリを食べる。分断された地域で近親交配による有害性は確認されていない。生息環境を整えるには人工林を自然林に変える事、放置人工林については手立てをしている。環境省の中国四国地方環境事務所野生生物課長からは岡山、西日本3県に残っているが九州は絶滅した。四国がそのように成らない様管理して共存していかなければならない。今も自然の象徴

であり恐れ多い存在として熊とどう付き合
っていくか。報道が煽っている所が有る。
危険性から言うとな熊より車の方がより高い
冷静に考えてリスクを下げて熊と共存して
いく。熊の目撃情報の提供をお願いしたい
と締め括った。

(報告…宮本良之)

グループ③

「山岳植物園

情熱の45年

オアシスの可能性」

徳島県上山町の南東斜面に持ち山があつ
て、戦後、伐採することになり、シヤクナ
ゲを植えたのが始まりであつた。標高90
0m、約5ha、1時間30分もあれば、すべ
てみられる。ツキノワグマの駆除も行つた。
そうしているうちにキャンプ場として利用
するようになった。岳人の森は、南向きな
ので、シヤクナゲは枯れることもあつた。
ヒメシヤガを植えたりした。初めのうちは、
商売になるものかという声も聞こえたりし
たが、20年目に、シヤクナゲ祭を行つてか
ら、バス・ツアーなども来るようになった、

お客さんが来てくれるようになって、山野
草と木を増やしていった。個性的な植物を
増やした。タスゲ、ユキモチソウ（大量に
なると野鼠の餌になる）ミヤギノハギ20
00株、ナツツバキ600本、などもやつ
てみた。すべてがうまくゆくわけではない、
ダメになることも多い。ナツツバキは、風
に弱かったし、毒草もあつた。池を造つた
りした。アサザが咲いたが、人が来なくな
ると、なくなってしまう。手伝うという
人が現れて、電力供給ができるようになった。
サクラソウ、ヒメシヤガ、ミヤマシ
ギ、クサボタンなども増えてきた。レンゲ
シヨウマ、シコクカクコウなども人気が出
てきた。シカ対策としてみると、甲斐犬を
3頭飼っていた。シカは、犬をつないでい
る所には来ないが、犬は、野に放つと、そ
のまま下の自宅に帰ってしまう（訓練した
犬ではない、というわけだ）。ジンリヨウユ
リなどもやられている。キレンゲシヨウマ
などは、種を園芸店で購入してくる。山野
草の会員からもらうこともある。オオヤマ
レンゲは失敗した。田んぼでは大きく育つ
たが、山ではシカが来るので、シカネット
を使ってみたが、オオヤマレンゲはだめに



なった。犬を飼うことはシカには効果があ
る。剣の兄さんがハスキー犬を飼っていた。
ハスキーが死んでからシカが増えてきた。
犬を飼うとシカが来なくなる。被害が止ま
る。シカが増えたのは、オオカミがいなく
なったからだと思っている。（山田説では、）
アメリカが悪い。戦争で負けて、木を植え

ることになったことが原因である。いまは、キリストカンバ（カンバツ）といわれて、40年間全く収入にならない。

（尾野） 猟師としては、ヤマドリや、シシを狙うことのほうが、効率が良い。（シカを狙っても、大した実入りにはならない）

自分の土地（山）に他人に来てもらって、山と山の自然を次世代以降に残したいと思っている。社会性を持つものを残そうと考えるようになった。絶滅危惧種（例えば、レンゲショウマ）を残そうと思っている。

花の名所を作って泣く人もいる。お金をかけて、無料で見てもらって、花が咲いていないと叱られたりすることもある。大勢の人に來てもらって、支えてもらう必要がある。一人が山で植物園を造ってもどうにもならないのだが、花が咲くことで、人の気持ちを育てることができるし、生まれてゆく植物に触れることができると考えている。これからは、周年観られる園としたいし、交雑しないように配慮もしてゆきたい。潜在植生を考えながら、人が少し手を加えることを基本にしている。外来種、園芸種は植えない。観月茶屋を造った。息子が料理

人なので、やまの料理を出している。つまるところ、故郷愛が、支えていることだと思っている。

（シカの質問なども出たのでシカの事を取り上げたが、つまるところ、山田さんは、この40年間 岳人の森と格闘して、森と好きに付き合ってきた、ということではないのか。尾野支部長は、この森には若いころから出入りしていて、山田・尾野の山の恵みに感謝を表明する趣旨の、グループディスカッションとなったような気がする。）

（報告：大船武彦）

グループ④

「人間とシカの自然界」

まずは講師、平井さんの自己紹介。平井滋さんは徳島県木屋平村木沢在住。地元では 地下足袋王子という名で有名である。たまたま地下足袋をはいて山を登っているところが徳島新聞に載った。それ以降、何が何でも地下足袋王子の名前を売ろうとしてインターネットで自分が歩いた山のことを書きまくった。その後、「地下足袋王子と

歩く剣山の花100、出会った花の恋人たち」という本を出し、自然観察会を行うようになる。いまは剣山の登山道整備、「おひさんプロジェクト」、オオヤマレンゲ保全活動、歩道整備・案内板の整備。こちらでは林野庁長官から感謝状をもらっている。他にとくしま協働の森づくり事業への参画。「親子ふれあい登山」、剣山スーパールンドを宝物に変える活動。さらには地下足袋王子杯トレイルランニングレースや、スーパールンドでラリーを開催している。いわゆる地元の有名人である。

さて、ここから「人間と鹿の自然界」の話。平沢さんはシカの食害問題の対策として食としてのシカ肉利用に取り組み、木沢シカ食肉加工施設を開設し、その経営を行っている。

他に県の職員とともに鹿食害調査も行っている。毎年新九郎山と不入山の同じ場所にツアーを組んで行っているが、05年に笹原だったところが2010年には笹がほとんどなくなっていた。同じ場所にあったシコクシラベは壊滅状態である。ほかにもいろいろところでシカの食害の惨状を見た。ウラジロモミの木が枯れていく様子や不入

山登山道でのブナの皮剥き。ついに平沢さんの愛車まで鹿にぶつかられた。

さて、いよいよシカ肉のジビエの話。平沢さんは国から55%の助成金を得て、徳島県で第一号のシカ肉加工施設を始めた。これまでの5年間で562頭(27年は177頭)を処理し、四季美谷温泉にジビエ料理



の材料として提供している。

当初は捕獲から処理まで1時間できなかった。シカ肉として市場に出すことはできないといわれたが、最近になって許可を得た。猟師さんであれば現場で血抜きを行う条件で、もう少しかかっても良いことになった。

次は肉を捌く工程の話。処理場に来てからは衛生のため作業工程ごとにナイフを煮沸消毒している。大事なのは血抜き。生きたシカを持ってきたら、その場で殺して血抜きをするようにしている。そのあとは肛門から腸を結束して内臓の摘出をする。毛を抜いて、大腸を残さないように洗う。次に散弾銃の弾が肉に入っていると困るので金属探知機を使う。さらに肉の熟成を行い、枝肉を腰椎から分離。さらに枝肉を部分肉に解体して、枝肉の汚染を防ぐ。

さらにシカ肉の話。

ファイル肉は大きな鹿でも50キロくらいしか取れない。このうち食用の肉になるのはさらに1/3くらい。腿肉でも取れるのは2キロくらいしかない。料理長の腕がないとそれも難しい。このようなことで腿とロースだけでは採算が取れないのでササミなどにもして肉を全部使っていかなければ

ならない。

いずれにしてもシカ肉は高たんぱく低カロリーで鉄分が多く、栄養は高価である。それを使って四季美谷温泉では2010年からシカ肉料理の提供を始めた。さらに2011年にはシカ肉ハンバーグの作成、2013年にはジビエ研修試食会を行った。今はいろいろところで試食、研修会を開催し、ジビエの協議会にも参加している。2015年には徳島県庁の食堂で鹿料理が販売され、全国ハラル文科大学の学食でも使ってもらっている。

四季美谷温泉で提供しているジビエ料理はシカ肉、竜田重、陶板焼、シカ肉の加工品などである。

問題と感している点はシカ肉の処理能力である。現在は1年で138頭が限度で四季美谷温泉で使う量だけ。これがいっぱいいっぱいのところである。(処理能力はせいぜい1日1頭〜2頭)また、シカ肉の利用には、内臓が痛んでない、3時間以上かかるようなところからは運んできたものは受け入れられないなど、いろいろ制限がありこれも一つのネックになっている。

(報告:近藤雅幸)

自然保護全国集会

2016高知に参加して

山川 陽一

全国集会から足が遠のいてしまつて、というよりも日本山岳会の活動そのものが疎遠になつてしまつてすでに4年が経過します。特段大病を患つたわけでも、山岳会の活動に関心が薄れたわけでもないのですが、個人的にどうしても物理的に時間が取れない事情があつたからです。

2011年3月11日。あの日、東日本を襲つた大地震と巨大津波、それに誘発された東電福島原発事故は、国民を震撼させました。当時、自然保護担当理事を務めていた私は、何かしなければといういたたまれない気持ちで、委員の方たちに協力してもらい手持ちの山の道具などを供出してもらつて福島の現地で支援活動にあたつていたホールアース自然学校に贈つたり、個人的にも資金援助をしたりしたのですが、なお釈然としない気持ちが残つたのは原発事故についてでした。地震と津波は人智では如何ともしがたい自然災害ですが、こと原発事故に関しては、明らかに人災です。それまで、恥ずかしながら水は蛇口をひねれば出るもの、電気はコンセントに差し込めば自動的に流れてくるものくらいにしか思つていない人間でした。原発についても政府のいうことを丸ごと信じてクリーンで安くて安全な基幹電源と思つていました。まさかこんなことが起こると思つても

みなかつたのです。そのとき初めて原発の書籍を何冊も買い込んでにわか勉強しているいろんなことを知りました。

ただ「原発反対!」と叫んで国会デモに参加してもそれがことが解決するわけではないと思ひました。地域で仲間を募り自分たちの力でエネルギーを作ろう、どうせやるなら本格的な事業としてやりたい、というわけで、以来、地域で自然エネルギーの活用と普及に向けて全身全霊を傾けて今日まで来てしまつたというわけです。

そんなわけで、山の関係の方々には突然舞台から降りて非礼の限りを尽くしてきてしまひましたが、今回全国集会に参加することになつたのは、たまたま私が選考委員（アドバイザー）を務めている山と溪谷社が主宰する日本山岳遺産基金の本年度の選考結果発表会の会場で川口章子委員長にお会いし、全国集会に参加するよう強い要請を受けたからです。四国の「三嶺の森をまもるみんなの会」が今年の本遺産基金の選定団体になつたことから、川口さんも発表会に参加されていたのですが、シカ問題は私にとつても縁が深く、私が自然保護委員長や担当理事を務めていた10年ほど前、全国集会を開くたびに全国の各委員からシカの食害の問題が話題になり、放置しておくわけにはいかないということで本格的に取り組むことになったいきさつがあります。

当時は、新聞などの報道もローカルでしか扱つておらず、それも農作物の被害中心で高山帯の間

題に言及している報道は皆無だつたと思います。

そんな中で私たちが考えたことは、まずはシカ問題をローカルな問題から全国区の問題にすることが先決だ、そうしないと国も地方自治体も動かないと考えました。その辺のいきさつは2008年に発行した報告書「いま、高山植物が危ない!」

——高山帯におけるシカの食害について考える——に詳しくのせてあります。関心をお持ちの方は、図書館に蔵書されているとおもいますので、どうかお読みください。本誌は山岳会の関係者だけでなく全国の主要な自治体にも配布しましたので一定の役割は果たせたと思います。

この活動が基となり現在山岳団体自然環境連絡会（7団体）の活動として続いている「山の野生鳥獣目撃レポート」が誕生しました。

そんなわけで、今回の全国集会は私にとつて大変意義深いものになりました。

最後に、私見を申せば、乱暴な言い方かも知れませんが、シカ問題は適正頭数のコントロールに尽きると思います。そこに照準を合わせて方法論を考え行動することでしょう。いまや、論より行動です。

併せて言うと、農作物は別にして高山帯におけるシカの防護柵の設置はやめた方がいいでしょう。私もかつて何回か伊那市主催の仙丈岳での設置作業に参加しましたが、根本的な解決にならないし、柵の設置自体が山岳自然景観の破壊だと思つています。

（自然保護委員）

◇自然保護委員会の活動記録◇

〈五月度〉

① 理事会報告 5月18日(水)

●総会の議案書の確認 定款の承認

●支部長の就任 関西支部・金井良碩氏

北九州支部・関口興洋氏

●新入会 27名

●ネパール大地震救援募金を被災地に届け終了。

② 山岳団体自然環境連絡会報告 4月27日

(水)

「シカ食害」に関する全国規模のアピール集会の開催の継続審議

③ 自然保護委員会報告 4月21日(木)

●全国集会実行委員会 5月6日(金)

●練馬区立牧野記念庭園樹木観察会 6月5日(日) 13時30分〜開催

●マナスル初登頂60周年および国民の祝日「山の日」記念行事を7月10日(日)市ヶ谷JICAで開催。自然保護委員会はパネルを作成し展示する。

●全国集会参加要項・役割分担などを決める。

〈六月度〉

① 理事会報告 6月8日(水)

●支部長交代 東海支部 高橋玲司氏

福岡支部 高木莊輔氏

高尾の森づくりの会長 吉川正幸氏

2017年度全国支部懇談会は茨城支部で開催

② 山岳団体自然保護環境連絡会報告 5月30日(月)

●7団体のプロジェクト・シカ問題のシンポジウムの開催を2017年3月頃を予定。HAT-Jから山の日を記念した植樹祭への協力依頼があった。

③ 自然保護委員会報告 6月22日(水)

●自然観察基礎講座・練馬区立牧野記念庭園 6月5日(日)、講師 平野裕也氏

参加者22名

●マナスル登頂60周年および「山の日」施工記念行事・自然保護委員会コーナー準備(7月9日)・会場担当(10日) 谷内、川口、小亀、廣田。

●自然保護全国集会、参加申込者6月21日現在82名、来賓高知市環境部長、四国森林管理局・保全部局長が出席の申し出があった。

全国集会プログラム、フィールドスタディについて検討、確認をする。

その他

●自然保護委員員の移動 山形支部・自然保護委員長 瀬川昭氏、委員 伊藤友七氏

◆購読料とカンパをありがとうございました

〈2015年度〉

堀内弘栄(川崎市)・齋藤長作(渋川市)・宮澤美渚子(東京都杉並区)・鳥橋祥子(東京都杉並区)・織方郁映(東京都世田谷区)・石岡慎介(市川市)・穴田雪江(東京都練馬区)・平石弘子(東村山市)・筑木力(新潟市)・黒田正雄(我孫子市)・河野直子(池田市)カンパ含む・太田義一(加賀市)・山川陽一(多摩市)カンパ

〈2016年度〉

太田義一(加賀市)・織方郁映(東京都世田谷区)・延島冬生(小笠原)・小野寺正英(奥州市)2016〜2018年度・小泉義彦(東京都世田谷区)・匿名希望(新潟市)カンパ含む・吉田敬(横浜市)カンパ・河野直子(池田市)カンパ 合計5万8千5百円

〈編集後記〉 当日配布されたレジュメが手元に届いた瞬間、表紙のカラー写真にしばし見とれました。

剣山クラブの会員さんが撮影したものです。山の神様たちが戯れそうな、三嶺山頂の箱庭です。こうした一枚の写真も、人の心に響けば十分に自然保護の種まきにつながりそうです。

今回掲載している全国集会の記録写真は、廣田博委員撮影です。次号では石川慎吾氏の基調講演、フィールドスタディ等をご報告します。 元川